

## 日本のマンガは桃谷から始まった（前編）

戦後の赤本マンガから世界のMANGAへ

### 中野 善典

《ふたりが、初めて手塚先生にファンレターを出したのは、2年前だった！その年発表された『ロスト・ワールド』を読んで興奮したふたりは、矢もタテもたまらず、手塚先生に手紙を書いたのだ！…そして、昭和

二六年、手塚まんがが第一黄金時代の頂点ともいえる『来るべき世界』（前後編）が発刊！！『来るべき世界』を読んで目くるめくような感動を受けた満賀道雄と才野茂は手紙だけではあきたらず、ついに手塚先生本人を訪問するという大計画をたてたのだ！》『まんが道』藤子不二雄（著）

藤子不二雄の自伝的漫画『まんが道』の第一話のシーン。当時宝塚に住んでいた憧れの手塚治虫に会うため、まだ高校生だった二人の少年が富山県高岡駅から大阪行き夜行列車に乗る場面からこの物語は始まる。

『ドラえもん』や『オバケのQ太郎』の生みの親である藤子不二雄。藤子不二雄が藤本弘と安孫子素雄の共同ペンネームであることは今ではよく知られている。一九八七年（昭和六二年）にコンビを解消後は藤子・F・不二雄、藤子不二雄（A）とそれぞれ名乗る。この漫画では少年時代の藤子・F・不二雄（藤本弘）が「才賀茂」、藤子不二雄（A）（安孫子素雄）が「満賀道雄」として描かれ、プロ漫画家「満才茂道」として成長していく過程が生き生きと描かれている。

この藤子不二雄の人生に大きな影響を与えたのが手塚治虫。彼は大阪時代に『新宝島』をはじめ、『ロスト

ワールド』『メトロポリス』など次々とヒット作を生み出す。終戦直後に突如現れた手塚治虫、彼を取り巻く昭和二〇年代当時の風景を考察してみようと思う。

#### 戦後の漫画事情

戦後、子供向けマンガには大きく分けて2種類のマンガ雑誌が存在したようだ。東京発の大手出版社発行のマンガと関西発のいわゆる赤本マンガ。前者でいえば講談社の『少年クラブ（倶楽部）』集英社の『少年少女 おもしろブック』秋田書店の『少年少女冒険王』少年画報社の『少年画報』などのマンガ雑誌が創刊される。もともと絵物語をメインにし、挿絵と同率の比重で結びつけられた小説、読み物、マンガも掲載した少年雑誌的な作りだった。その過程で街頭紙芝居と関連した絵物語からスピントフした永松建夫の『黄金バット』や山川惣治の『少年王者』などのマンガ単行本が出てくる。

一方、関西発のマンガは、粗悪な紙に印刷されたマンガで、表紙に赤い色を多く使い、書店を通ず正規のルートを使わず、駄菓子屋、夜店、縁日の露店などで売られた、と一般的に説明されることが多い。『マンガ古書マニア マンガお宝コレクション 1946～2002』（江下雅之著 インターメディア出版 二〇〇二年）には、《赤本とは、チリ紙を転用した仙花紙に印刷され、マニ

ラボールを用いたペラペラの表紙、版型はB6判という特徴をもった安売り本の俗称で（マンガ本以外に小説も多かった）、表紙デザインにオレンジや赤のどぎつい原色系の彩色をほどこした本が主流だったために、そのような呼ばれ方をされるようになった。赤本マンガの版元は大阪の玩具問屋街の松屋町近辺に数十軒も集中していたが、その多くはメノコの製造元だったとある。

赤本マンガの黄金時代は昭和二十年代の初期から中期ごろ。値段は十円から五十円ぐらゐまでが多く、高くても七十円から九十円、判型も当初はB6判の小型サイズが中心で、ページ数も二十四ページから四十八ページのものが多かった。作者名や発行所名が無記入のものも多かったという。手塚治虫は《赤本とは、当時駄菓子屋の軒先につり下げられていた、一冊10銭ぐらゐの赤い表紙のマンガ本のことです》『ぼくのマンガ人生』手塚治虫著 岩波新書 一九九七年）と戦前の子供の頃のことを語っている。赤本マンガ自体は戦前から存在していたことがわかる。

一般的には戦後大阪で出版されたマンガはすべて赤本としながらも、松屋町周辺にはおもちゃ屋と本屋があり、おもちゃ屋が扱っていたマンガが正味の赤本・おもちゃ的な赤本だった。ただ、赤本を扱っていた中にも良い本を出していた出版社がある一方、漫画が売れるという理由で戦後急にマンガを始めたところがあり、それが極端に2種類あった。『マンガ大戦争 1945～1980』幸森軍也著 講談社 二〇一〇年）『新宝島』が爆発的にヒットし、赤本マンガのブームが始まった後について、『ぼくはマンガ家』（毎日ワーズ 二〇〇九年）の中で手塚も《雨後の筍のように泡沫出版社が生まれ、赤本漫画家が、それこそ無数に出現した》と述べて

いる。

## 正規ルートにのった「赤本マンガ」

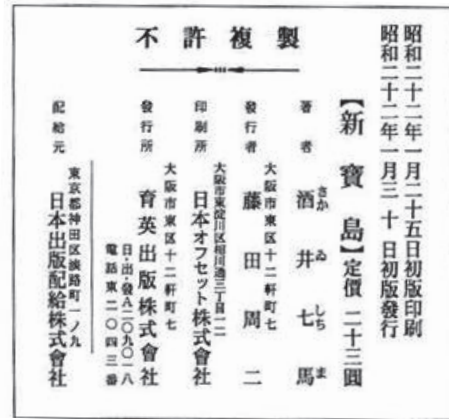
2種類の赤本。ひとつは、従来の露店・夜店・駄菓子屋などで売れる小さくて薄っぺらでちやちやなおもちゃ本もうひとつの種類が正規ルートでも流通したいわゆるストーリーマンガで構成された本格的なマンガ本である。若き藤子不二雄をして「絵が動く」と言わしめ、今までになかったカラー口絵付き二百ページの奇想天外な冒険談がモダンタッチで展開される手塚治虫の『新宝島』（昭和二二年刊）がその嚆矢と考えてよい。（ついでに言えば、ストーリーマンガの台頭が絵物語の衰退につながっていくことになる。）

《赤本マンガは、主に大手の出版社に対抗して弱小出版社が刊行したゲリラ出版で・・・大阪には学習参考書を出版してきた伝統があったものの、学参もの専門の出版社が手がけた例はさほど多くなく、松屋町のおもちやの御屋や、にわか業者が手をそめた例が多い。出版の流通にのるものはよい方で、駄菓子を夜店で売るために、みかん箱に詰め込んで販売する業者もいたという。いわばオモチャ的な要素をもつ出版社であったわけだ・・・ただ、手塚治虫や田中正雄らの出版物は扱いがちがった。一部の人気作家たちのものは、一般の書籍と同様に正規のルートにのって、デパートのショーウィンドーに展示されている。》『アーチストになるな 手塚治虫』 竹内オサム著 ミネルヴァ書房 二〇〇八年）

正規ルートで販売した出版社が、後述する育英出版、丸山東光堂、不二書房などにあたり、それら以外のゲリラ出版社と同じ「赤本マンガ出版社」と一括りにすると「赤本マンガ」とはなにかという理解ができなくなる。

つまり赤本マンガでも良質のものは正規のルートにのっていたのである。

『新宝島』の奥付を見ると確かに「日本出版配給株式会社」と載っている。



『新宝島』昭和22年1月30日付の奥付

多くの文献を繙いてみたが、結局戦後出てきた関西の赤本マンガの定義と当時の雰囲気が一番よく表しているのは次の記述のように思う。

《ここという「赤本」とは、戦後の混乱期に、大阪や東京の零細業者（オモチャ屋や印刷屋）が大量に出版した子供向け漫画単行本である。東販、日販などの書籍卸から一般書店へという「正規」のルートではなく、駄菓子屋や露天商の夜店などでその多くが売られた。印刷も造本も粗悪で、内容も盗作・海賊版が横行するなど、いたってお粗末なものが多かったが、そんな赤本の中から、戦後の子供漫画をリードした数多くの新人漫画家が育っていった。その代表とえば『新宝島』で一世を風靡した手塚治虫である。》『手塚治虫とボク』うしおそうじ著 草思社 二〇〇七年）

しかし当初あの手塚治虫でさえ、東京で活躍する先

輩漫画家の横井福次郎から《もういい加減にメンコ屋の仕事はよせよ。そんなことでは漫画家の中には入れないよ》と一喝された》という。『ぼくはマンガ家』（前掲書）当時は関西の赤本マンガを中央の漫画家らは「低級」のものとして軽蔑していた。

## 松屋町筋

手塚治虫自身、著書『ぼくはマンガ家』（前掲書）の中で次のように語っている。《松屋町―マツチャマチと読む。大阪の玩具菓子問屋街で、・・・ベッタンと呼ばれるメンコ、奴胤、紙製の面、ボール、玩具の刀、造花や花火、カンシヤク玉、ブリキのピストル、風船ガム、お好みあられ、するめに塩昆布、ねじきり飴に一口カステラ、そして赤本・・・

こういった雑貨食品を満艦飾のように陳列し、リュックを背負い、買い出し囊をぶらさげた中国、四国くんだりの仕込み屋が、田舎の雑貨屋へ売るために店先に立ち、泉州なまりや京なまり、岡山弁、広島弁、高知弁が飛びかい、本だろが、一からげにしてリュックにぶち込んで帰っていくのだった。この界限に十四、五軒の零細出版社ができて赤本を出していたが、それはたいてい問屋あがりの、出版とは無縁な一発屋で、漫画ブームをあてこんで転業したのであった。》

松屋町筋近辺に関して、『続々 大阪古地図 むかし案内 戦中〜昭和中期編』（本渡章著 創元社 二〇一三年）に、《東横堀川の東岸から上町にかけては、北から釣鐘町〜内本町に連なる既製服、農人町以南の機械、龍造寺町の印刷紙器、松屋町筋の菓子・玩具と問屋街が続いていることが書かれている。》

このあたりのことを、松屋町筋の末吉橋近くで昭和三〇年代から貸本取次店を経営していたF氏に話を聞

いた。F氏は赤本ブームの後の貸本ブームの時代の話としてではあるが松屋町界隈のことを次のように述懐してくれた。

「貸本ブーム時代(昭和三〇年代)ではもう玩具店や駄菓子屋では赤本マンガは売られなくなり、竹内書房などの貸本卸問屋でマンガが売られるようになった。そして玩具や駄菓子を仕入れに松屋町にやってきた地方からの業者の人たちが、本屋に寄ってついでに買っていった。地方では活字・漫画に『飢えた』人たちがいて、地方の駄菓子屋やおもちゃ屋ではマンガが飛ぶように売れた」。

手塚治虫が世に出てきた戦後まだ物資が少なかった時代(昭和二〇年代初期)なら行商人の数はさらに多く「マツチャマチ」は活気があったであろうことは想像がつく。実際、『続 どのくらい大阪』(毎日新聞ふらいで)と編集室編 いんてる社 一九八五年)に、戦後、人々が甘いものを求め焼け野原から復興した松屋町筋にやってきた当時のことを、松屋町菓子問屋組合の組合長が述懐している。《朝、起きたら足袋のこはぜをとめる暇もなかった。なんせ店の前では客がまつているんやから。その時分で売上は一日五十万円。今ゆうたら夢みたいな話や。》その時代に医学生の手塚は松屋町筋界隈を原稿をもつてうろろしていた。手塚も『手塚治虫漫画全集 有尾人』(講談社 一九八二年)の「あとがき」に、《松屋町筋に来るお客は大部分がちいさな雑貨屋とか駄菓子屋の業者でしたが、店頭に並べておく漫画本は人気があるので、よろこんで10冊、20冊と仕入れていくのです。松屋町は・・・独特の賑わいがありました》と語っている。

### 『新宝島』の育英出版

『手塚治虫と路地裏のマンガたち』(中野晴行著 筑摩書房 一九九三年)には《育英出版は戦前から児童書などを手掛けており、大阪では中堅どころの出版社であった》とあるが、赤本マンガ出版社の「中堅」とはどういうことだろうか。

『手塚治虫漫画全集 有尾人』(前掲書)の「あとがき」に、手塚は《まがい出版社とは別に、ちゃんと出版物だけを出す正式の出版社もありました。「新宝島」を出した育英出版は、この松屋町筋のいちばん北のほうにあつて、いちおう体裁をととのえたまともな出版社でした》と述べている。さらに、『手塚治虫漫画全集 メトロポリス』(講談社 一九七九年)の「あとがき」には育英出版のことと思われる記述がある。《I出版社などは、従来のガラクタ的なオモチャ本から、抜けだして、本らしいていさいをそなえたものをだしたいという企画をたて、ぼくは、SF大長編をやれと話を持ちかけました。この企画は一六〇ページ、オール2色刷りで、ハードカバー、箱入りという従来にない豪華なものでした。》もちろんこれは『メトロポリス』のことである。

『新宝島』の奥付を見ると「発行所 東区十二軒町七育英出版株式会社」、「発行者 東区十二軒町七 藤田周二」とある。また、『アーチストになるな 手塚治虫』(前掲書)によると、育英出版の藤田は戦前から本づくりを手掛けていた元家村文齋堂(東区農人橋二一五)の社員だった。

戦中・戦後の電話帳を調べてみると、「藤田周二」の名前は見つけることができたが、職業別の「出版」の欄では「育英出版」を探し出すことはできなかった。一方、後述する手塚治虫の作品を数多く出版した「不二書房」

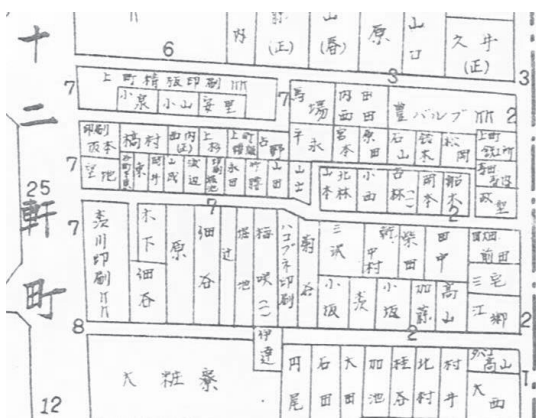
はしっかりと戦後の電話帳に掲載されていた。

さらに法務局で土地台帳を調べてみると、「藤田周二」の名義は見当たらなかった。借家であったと考えられる。育英出版は本当に「中堅」なのだろうか。

入手できた最も古い昭和三八年発行の住宅地図で「東区十二軒町七」を探したところ、「育英出版」「藤田周二」どちらも見つけることができなかった。『新宝島』が発刊されたのが昭和三二年、赤本ブームは昭和三〇年には衰退しているのでそれまでに育英出版が廃業していたのなら当然昭和三八年発行の住宅地図には載っていない。

「東区十二軒町七」は現在「中央区十二軒町二」あたりで、近くに駐車場やマンションが新しく建てられているが、古民家がほぼ長屋のような形で当時の面影を残している。昭和三八年発行の住宅地図を見比べながら現地を歩いてみた。

「東区十二軒町七」の地域はそれほど広くはない。昭和三八年当時の地図でも印刷所が6軒ある。



十二軒町 (昭和38年発行住宅地図)

取材してみると、生まれてからずっとそこに住んでいるという九三歳の古老F氏に話を伺うことができた。F氏によると、この辺りは印刷屋がたくさんあり、看板も立てずに個人営業の形でやっていた人たちが多くいたという。「印刷は当時『色もん』と言ってたんやけど、ベトつと色を塗る印刷でね。オフセット印刷をこの辺りではみんなやってましたね。ここは井戸水が豊富に使えたので印刷屋には都合がよかったですよ。育英出版？聞いたことないね。手塚治虫の『新宝島』の出版社？初めて聞いたよ。」

近隣の住民にもあたってみたが、やはり誰も「育英出版」のことは知らなかった。近くにある古くから営んでいる酒屋の老夫婦は「あー、育英出版、なんか聞いたことあるな」と語ったが「手塚治虫の育英出版」となるとやはり知らなかった。

日本のマンガを一気に変えた革命的マンガ『新宝島』の出版社を誰も聞いたことがないという。

手塚治虫の自伝的マンガ『がちやばい一代記』に手塚治虫が赤本出版社を訪ねるシーンが載っている。これを見るとトタン屋根には石が置いてあり、いかにも戦後のバラック小屋のように描かれている。おそらく当時の赤本出版社のイメージは多かれ少なかれこのようなものだったのだろう。私が撮った十二軒町の現在の写真を見ると結構雰囲気が似ている。



手塚が描いた  
「赤本出版社」



旧東区十二軒町七

『手塚治虫と路地裏のマンガたち』(前掲書)に面白い記述がある。《赤本出版社の事務所(といっても仕舞屋(しもたや)のようなバラックがほとんど)にはいつも何人かの青年が風呂敷に原稿を包んで売り込みに来ていた。《仕舞屋の二階のようなどころに、文机を置いて何人かが分業でこれをやっている。》また、《印刷屋や本の間屋までがマンガ出版社の看板を掲げて、営業を始めた》との記述もある。

《曲がりなりに数冊以上出版しているのは東京に六十軒、大阪に二十軒、その他あわせても百軒とは上がない。大い裏長屋の二階の間借り、表札を並べているのは良いほうで、社員の二、三人も使っているのはまず十件というところ。超零細企業というわけだ。また、そうした出版元は、印刷屋の内職として営業しているものももっとも多く、東京では京橋あたり、大阪では松屋町筋界隈が拠点となっている。》(『戦後マンガ50年史』 竹内オサム著 筑摩書房 一九九五年)

当時の赤本マンガの印刷は「描き版」という特殊印刷

技術を使っていた。《描き版というのは原稿をトレーシングペーパーでなぞって手作りしてジंक版(亜鉛板)に転写して版をつくる製版方法である。亜鉛板の上に油墨という特殊な油性インクを使って筆で絵や文字を書き、薄くゴムの皮膜を塗り、表面を洗浄液で洗うと平版ができるのである。製版コストが写真版に比べて安かったことから、主に小ロットの印刷物に使われ、『新宝島』もこの製版方法で作られた。》(『謎の漫画家・酒井七馬 『新寶島』の光と影』 中野晴行著 小学館 二〇一一年)

十二軒町の古老F氏が説明してくれた印刷工程、十二軒町には印刷屋が多く存在していたこと、込み入った長屋と手塚が描いたバラックの赤本マンガ出版社等から、私はどうも育英出版とはこじんまりした個人営業の印刷屋のおやじが看板も掛けずに赤本出版社をやっていたのではないかと想像している。

手塚は『新宝島』が出版された昭和二年の夏、古い大型のトランクを手にして東京に出かけている。地方のマンガ家してみれば、中央で活躍することは憧れであり、何らかの糸口を見つげるため大手出版社の講社を訪れている。「ぼくのデビュー日記」(『手塚治虫漫画全集 新宝島』所収 手塚治虫著 講談社 一九八四年)には、《昭和二年八月九日(土)朝、音羽の講談社に寄った。じつに立派な豪壮なビルに驚いた。(それまで出版社といえば大阪の零細出版社だけだったので、度肝を抜かれたのである。》と記されている。この記述を見ても、当時大阪の赤本出版社と中央の漫画出版社との規模の違いが明らかであることがわかる。

### 『新宝島』の奥付の謎

疑問点も残る。昭和二年一月三〇日に発行された

初版本『新宝島』の奥付を見ると、「印刷所 大阪市東淀川区相川通三丁目一二 日本オフセット株式会社」となっている。(57ページ参照)もし藤田周二社長の育英出版が印刷屋上がりならなぜ自社で印刷をしなかったのか。



『新宝島』昭和22年4月20日付の奥付

というのも実は、育英出版はこれより約三カ月後の昭和二十二年四月二〇日に再販本を出している。その奥付には「印刷所 東区十二軒町八 ミスミ印刷株式会社」となっていて初版本の印刷所と異なる。さらに、十二軒町「七」にある育英出版(初版本奥付)が十二軒町「八」にあるミスミ印刷に印刷を委託している。古老F氏の話だと十二軒町にあった印刷所は小規模経営ばかりだったのだから、大量の部数を印刷できたのだろうか。できたのならなぜ自社で刷らなかったのか。さらに、おかしなことに四月二〇日発行の再販本奥付にはミスミ印刷株式会社の住所と育英出版の住所が

「東区十二軒町八」と同じである一方、一月三〇日に発行された初版本奥付には「発行所 東区十二軒町七 育英出版株式会社」となっており、番地が「七」と「八」で違っている。誤植なのかもしれないが、「発行者」に関してはこちらの奥付も「東区十二軒町七 藤田周二」となっている。

### 『新宝島』の原作・構成者 酒井七馬

藤子不二雄は著書『二人で少年漫画ばかりを描いていた』(毎日新聞社 一九七七年)の中で、『新宝島』を読んだ時の衝撃を次のように述べている。《これは確かに紙に印刷された止まった漫画なのに、この車はすごいスピードで走っているじゃないか。まるで、映画を観ているみたい! そうだ、これは映画だ。紙に描かれた映画だ。いや! まてよ。やっぱりこれは映画じゃない。それじゃ、いったいこれはナンダ?!》

『新宝島』は作画が手塚治虫なのだが原作・構成は酒井七馬という名の手塚より二十三歳年上の先輩漫画家である。因みに手塚は一九二八年(昭和三年)生まれ。『新宝島』が出版された昭和二十二年当時手塚は一八歳、酒井が四二歳。

簡単に酒井七馬の経歴を紹介する。一九〇五年(明治三八年)一八歳頃漫画雑誌『大阪パック』で漫画を描き始める。しばらくして中座の看板描きをするなどした後、大阪新聞の漫画記者となり、そこで同僚の河井恒雄(後述する)と親交を深める。その後日活京都漫画部で作画を担当。戦中の三十五歳の時には、慰問袋用の漫画単行本を描きこれが当たる。そして戦後の昭和二十二年単行本『新宝島』を手塚治虫と共同で刊行。赤本マンガブーム後は『大阪日日新聞』に「鞍馬小天狗」を連載するなどした。詳しくは『謎のマンガ家・酒井七馬伝』「新

宝島」の光と影」(中野晴行著 筑摩書房 二〇〇七年)を読んでいただきたい。

手塚治虫と初めて出会ったのは同人誌『まんがマン』の例会。《どうや、ある出版社から話があるのやが、ひとつぼくのアイデアと、君の絵という合作で長編漫画を描こうやないか」と相談を持ち掛けてきた」と手塚は著書『ぼくはマンガ家』のなかで語っている。

その前年、大阪大空襲で住んでいた酒井のアパートが焼失。日活京都漫画部で知り合った元活弁士で後に司会や漫談師で活躍していた人見誠一郎の西成区玉出にあった自宅の二階に酒井は間借りする。そこに、戦時中国内の軍需工場や基地を慰問のためにまわっていた田端義夫が仮寓していた。

余談になるが、田端義夫は大正八年三重に生まれ。父が亡くなり、六歳の時兄を頼って家族とともに鶴橋に引っ越す。大阪の湊町に着いた田端は大八車に荷物をのせて鶴橋方面へ歩き出す。途中千日前を通った時に大阪劇場(大劇)が目に入った。鶴橋尋常第二高等小学校(現北鶴橋小学校)には貧困ゆえに三年半しか通えなかったが、苦勞の末に、初のワンマンショーをその大劇で催す。(『オース! オース! オース! バタヤンの人生航路』 田端義夫著 日本放送協会出版 一九九一年) 因みに田端は大空襲にあった時は大阪常盤座に出演中でミナミの玉屋町の玉屋旅館に泊まっていた。その後玉出に移ったと考えられる。そこで酒井と出会う。 田畑の初のワンマンショーが昭和二十四年、手塚の『新宝島』が発刊されたのは昭和二十二年、力道山がプロレス転向を決意するのが昭和二十六年。戦後日本が動き出した時代だ。(後編に続く)

(東大阪新聞読書友の会)